

「文之誉 小学編」

(蔵光工稿)

蔵光純子

はじめに

「文の誉は」、祖父蔵光工が、明治四十四年十二月から大正五年四月までに書いた、五冊の「綴方練習帳」である。この綴方文集については、その概要を、本誌前号に紹介しておいた。本号では、「文の誉」の全文を掲載させていただく。

なお、翻刻にあたっては、次の要領にしたがった。

○変体がなは、印刷の都合により、すべて現代がなに改めた。

○改行箇所は、「あり/ました。」のように、/で示した。

○添削により消してある箇所は、「ヲシテ」のように、傍線を付して示し、その右に改められた文字を記入した。

○添削により、脱字等の補つてあるものは、「ごしんえくを」のように、脱落箇所を「く」で示し、補足された文字等を、その右に記入した。

○文題の上につけられた「甲上」などは、指導者の評価である。

また文章末の( )内は、指導者の評語である。いずれも、もと、朱で記入されていた。

○文章中にみられる圏点は、指導者によって付されたものである。

○文章中、朱点により用字のまちがいを指摘したのについては、傍線を付して示した。ただし「マ」のように、傍線の横にママと記したばあい、その傍線は、筆者(蔵光工)が施したものであることを示す。なお、印刷の都合上、ときに誤字の形を示すことができないものも、きわめて少数ながらあった。そのばあいには、それにもっとも近い形の漢字を宛てた。

○目次・執筆月日は、本誌前号に示しておいたので、ここではすべて省略する。

尋常小学校第四学年

甲上 第一 河野通有

河野通有といふ人は四圍のいよといふ所の人/でありますある時元の兵がはかたの圍に出て見るとあ/との人は石がけの中からふせいでゐるのから身分は/これではいけないと思つてそこらあたりにある小さい船/にのつて敵の大船をぬがけて進ぬよせてほばしらはは

／しごととしてまっさきに進んで出て敵の大將のこっぴれつを／取こにしてかへつて来ました通有はかういふ忠義をした／士でありましたであるから私らも忠孝二つのみちをつく／さねばなりません

### 甲上 第二 冬休のつゞり

私は二週間の冬休が来たのでたいそううれ／しうございましたまづ初にした事は雪なげ／をしました又本もよんだがしらない字が／あつてこまりましたまだ／面白しいばい／のまねをしましたそれから四五日たつと一／月元日になつて学校に来てごしんゑくをおが／んでかへりましたそしてつゆ谷に行つてい／ろはくやじらい工兵もしました又はなをかけ／たり山に行つたりしてかへつたがかへつて見ると／呉服屋が来てゐましたそれからと／ふをか／つ／来たりいろ／／な手つだいをしました又本もさ／らへたりさんじゅつもしましたする中に九日となつて学校に来ました

### 甲 第三 駝鳥

駝鳥は陸鳥の中で一番大きくありますから人をのせたり／物をはこんだりするが空を飛ぶ必要はありませんだからつ／ばさは小さうてはぎは長うあります又首も長うあります／てはしることは馬よりも早いといふ事です併しくちばしは短／こ／うあります駝鳥のおりばは日本にはよけいおらないが外／國にはたくさんおるといふことです「わしもど／ぶつ／へんでみま／した。」

### 甲上 第四 着物ノヒトリ言

私ハ元ハ一ツブノタネデアリマシタマツ五月頃ニ人ノ家ノ畑ニ蒔

／カレマシタソシテコヘヲモラツテズン／大キクナツテ七月頃ニ花／ヲサカシテモラヒマシタマタ十月ノ初頃ニ實ガ熟シマシタソシテ綿／トイフモノヲ出シテ綿クリ機械ニカケラレテリツパナ綿ニサレマシタ／ソシテ一人ノオバーサンニヒカレテ細長イ物ニサレテ機デタ／カレタリ／シテ又ハリヲサ／レタリシテヌハレマシタソシテリツパナ着物ヲコ／シラヘラレテ一人ノボンチャンノ着物ニサレテ土ツツケラレタリシマシタ

### 甲上 第五 問合の返事

このあいだお手紙を下さいましてまことに有りが／たう存じますあなたは、世はすべて相持なりといふ／事をし／らして下さいといはれたが私は先生にき／ま／したが、世はすべて相持なりといふのは世の者は皆た／すけあつてくらさねばならぬといふ事でございます。

二月八日

藏光工

牧田虎治君

### 甲上 第六 礼の手紙

この間は勝手がましいことを類ましたが昨日の読／方の時大そうこまつてゐましたが今日頃の手紙を／見ると大そうしんせつに書いてあつて私は一人で／勉強が出来るよ／うになりましたから大そううれ／しう御座いましたまたしらない事があつたならば／どうぞ御知らせ下さいませちよつと一口御礼申し／上げます

二月十五日

藏光工より

伊藤浅吉様

## 甲 第七 我が帝國

世界には五大陸あつて我が帝國はアジヤ大陸の中の東にあつて島國でありますアメリカアフリカ/インド等外國の氣候は寒い所や暑い所など/でからだのために、悪いが我が大日本帝國の/じ節は四季に分けて春夏秋冬夏は甚だ暑くも/なし冬も甚だ寒うありませんだから人のためがよく春は花でたいさうようございます又着物もよ/いかげんに着てゐて色は黄色ですそして學問もならへす/きな事が出来るのだからよるこばねばなりませんこ/れは皆天皇陛下の御ためだと思ひます

### 橋中佐

明治三十七八年ノ戰役ニ君ノタメ國ノ/タメ名譽ノ戰死ヲトゲタ軍人ハ大ゼイ/アツタガソノ中デモ海軍ノノ廣瀬中佐陸軍ノノ橋中佐ノ二人ハ軍神トマデイハレタノ橋中佐ハ東宮武官トシテ皇太子殿下ノノ御信任ノアツイ軍人デアッタ三十七年ノノ四月第二軍ニツイテ戰地ヘ向ツタガ中ノ佐ハ今度ノ出陣ヲ幸ニ帝國ノタメ天皇陛下ノノ御タメニメザマシイ働ヲシナケレバノナラナイト八月末ノ遼陽ノ戰ニハ部下ノノ大隊ヲヒキキテ勢銳ク進撃シタ

## 甲上 第八 名古屋城

名古屋城トイフノハ尾張ノ國ノ名古屋市ノニアリマスコノ城ノ棟ノ両ハシニハ高サ八尺五ノ寸モアル金ノシヤチホコガオイテアリマスカラ遠イノ所カラ見テモ朝日ヤ夕日ニカマヤイテタイサウノリツパナノデ名高ウゴザイマスコノ天守閣ハ徳ノ川家康ガ諸大名ニイヒ

ツケテ加藤清正ガコノシラヘタモノデコノ天守閣ハ今ハリ宮ニナツテオリマスソノ外ハ兵隊ノオル所ニナツテオリマス、ノ名古屋ハコノ城ガアルニヨツテ尾張名古屋ハノ城デ持ツト歌レマシタコレハ名古屋城ノ金ノシヤチホコガリツバナカラデシヨ。

## 第九 虎と猫

「猫でないしよこに竹を書いて/おき」といふことあり虎と猫とは/最もよく相似たる獸なり虎も猫/もあご短く首太しあご短ければ/物をかむ力強くくび太ければ他ノの獸類をとらへたる時之を運び/去るに便なり足もまた太くして/力強し虎は前足の一撃にて鹿な/どをたふすこと猫のねづみをと/らふるが如し足の先には鋭くし/て曲れる爪あり用なき時之をか/くすこと虎も猫も同じ猫の口/には上下に二本づつの鋭き牙あ/りて肉をさくに適す又其の舌に/は内方に向つてはえたる太き毛ノの如きとげあり骨に附きたる肉/を食取るに便なり虎もまた同じノ虎も猫も足の裏やはらかなれば/歩む時音を立てずしてしづかにノ他獸に近より急に飛びつきて之/を捕ふ虎もまた猫の如くよく木ノによち上ることを得此の外目鼻ノ耳の形より尾の長くひげの太きノまで相似たる所甚だ多しタノ猫ノの毛色には黑白三毛など様々あ/れど虎は一様なり猫の中にも其ノの毛色虎に似たるものあり之をノ虎猫といふ。

## 尋常小学校第五学年

### 甲 第一課 草薙劍

草薙劍は昔素戔鳴尊が太蛇をノ平げられる時太蛇の尾に一本ノの劍あらはれ出でたりそれをノ名づけて天叢雲劍と申しますノそれよ

り後日本武の尊が賊を御せいはずなざる時草を薙はらはれた／から又それを草薙劔といて／今は尾張國の熱田神宮にまつ／つてあります

### 第三課 おまつり

郷社神前神社のお祭は四月十九日でありましたがその前の日から  
のしん／でまて居りました祭の日となつて空を見るとた  
くさんの雲が出／て雨が降つてゐましたするうち／にじかんが来  
て学校へ来て十一時ごろにがくたいをしてまいってかへってか／  
ら父母とまいていろいろなものを買／つて居るとさかさねりが来  
てさかさ／をねつたのを見てかへりました。

(サカキネリニハオトモダチガキタデセウ)

### 第四課 麦

私ハ秋ツメタイ田ノ中ヘヲトサレタガ

### 甲下 第五 利根川

利根川ハ日本東部ノ大川デアッテ全長凡ソ七十三里アリ／昔ヨリ  
坂東太郎トイフ名ガアリ利根川ハ上野ト越／後ノ国境ヲシテ利根岳  
ヨリ出テ数多ノ小流ヲ集／メテ沼田町ニ行キ是ヨリ吾妻川ヲ合セテ  
赤城、榛名、ト／イフ二山ノ間ヲ流レテ前橋ニ行キ更ニ渡良瀬川ヲ  
／合セテ栗橋ニ至リ間モナク赤堀川ト権現堂川ヲ／スギテ関宿ノ北  
ニテ利根ノ本流ヲシ江戸川ハ南ニ／流レテ海ニ入り本流ハ鬼川小貝  
川ヲ合セテ大平洋ノニ注ギマス

### 甲上 第六 螢狩り

吹き来る涼しい風に面をふかれながら  
あー昼は暑かったなーとく壽雄や友達の英治君等／又それ／  
三人と螢狩りに出ました出て見ると／涼しいよい風がふくから心地  
がよーござい／しましたするうちにあちらからもこちらからも四／方  
八方で歌を歌って居る声が開こへるそのうちに螢が三。ピ。キ。出。た。か。と  
思へばいつの間に／かたくさんになると弟はそこだ／と／ゆびを  
さゑをして勇んで居るから私もげ／んきを出して沢山の螢を取つた  
すると弟は／かごの螢を見て勇んで居たその時は大そう／ゆかいで  
ありました

### 甲 第七 水泳

私は火曜日に水泳に出やうと思つて庄／藏さんや英治さん又た  
くさんの友達と水泳／に出ました又その前日にも出たがまだ／面  
白かつたのは五月一日頃に青谷の／で／らんかいの時恩田さん等と  
共に見／に出たがすんでるたから水を泳ぎました／がそこに船があつ  
たからそれに乗って居ると向／から一人の男が来て為さんや武さ  
んの頭をた／きましたその時私や恩田さん／はをりてゐてまんよく  
もかけ／にげたすと／そのものもにげてしまつたからた／かれ  
た／者も来たからかへつたあとでさむかつた／なといつた  
(評、男ハナセタ、イタデセウ、アトデナゼ寒カッタデセウ)

### 甲上 第八課 夏休中ノ一日

アル日福サンが大坂カラカエラレタ時話ヲ聞ク／ト大坂城ノゲシ



甲上： 茸狩

松茸はい取茸様々の茸を取ってこよーと山に行った向ふの方に  
も人がやん／＼と山をあるいてゐる

(目ヲサラノヤウニシテ工サンガタクミニサガシ出ス時ヲ見  
ルヤウナ)

甲上： ことばちがひ

私もがとほい所に出て話をするよことばちががってを／＼か  
やうである、ある時覚雄さんが手紙に／＼ことばちががってをか  
と書いて下さって大／＼笑した

甲上： 柿とり

長いさほ大きなかごを持って柿とりに／＼二つと取ってゐる間  
にぱつんとをちた／＼しまったといひながらべちゃん／＼／＼くい初めた  
甲上： 水車  
きつとん／＼とぐるぐるまいをしてはたらい／＼てゐる、時による  
と朝から晩まできつとんといつてゐる  
(オモシロイヨクカケタ)

甲上： 月日時分

一分二分とたつうちに一時間二三四とたつうちにとし／＼とし一日  
早いものと思つてゐると一月になつてすんだ

甲上： 思ひ出す去月の今日

朝早くから「かはー／＼」と鳴いてゐる青天、去／＼月のことを思ひ  
出すとちよーど今日は二十三／＼日だ家は流れる堤は切れる大洪水の  
日／＼だ山崎の前や末治さんねの前見るもお／＼そろしい、呼鳴鳴呼あの  
「かはら」あそこら一面に水だった／＼と思ふ今日今日学校に来が  
け、く、大きな河原を見て思った

甲上 柿売

食いたい柿を貨幣に換うとおしくても／＼一銭二銭の金と換へて様  
々の物を買を／＼とするのは農夫の心がけ

(マダナニカアッタラヨサソウダ)

甲上 そーじばん

ほーきぞーきんちりとり色々などーぐを持って／＼早くそーじをす  
るのは亀尻のしものそーじ／＼

(ジマンヲシテモ昨日ノ亀尻ノソウジニハオウチャクモノガ  
アッタヨ)

甲 日本一と思フモノ

高イ／＼富士山モ新シイ新高山ノ日本一ニハ降ノ参スル程デア  
ガ美シイコトニハ日本一デア  
ルノ又山ト山トニカケラレタルアマ  
ル／＼ノ鉄橋湖デハ近江ノビハ湖川デハ、シナノ川ナドガ日本一と思  
ヒマスノ寺ナドハソソナニ多ク昔建テタノハナイガ大和ノホーノリ  
ユージガ日本一ト思ヒマス

甲下 秋の景

赤黄いの色の山全山こゝく此の色で夕日の光にかざやいた  
錦と思ふばかりの紅葉柴の／かれ葉鳴呼美しいと見物するのは秋の  
景色であるが又桜のさく春も美しいであらうと思つてゐますがま  
だ／＼来年の春来年の秋をまつ中には美しい冬の景色を見るの  
でせう。

(又桜のさく……カラシマイガイケマセン)

甲上 雪降

雪降は面白い、いままで美しかったさざんかば／＼らり。と  
ちつてゐる見るとさびしいあらは頭に穴があくかと思ふばかり  
だ。社ののいてうには早まっ白になつて向ふの山は銀世界身を切  
るばかりふきすさむ／みちの家ではぼん／＼とけむりが出てゐる今  
までこた／＼にあたつてゐた子供もそけを持ってかどにであら  
れ／＼をうける

甲上・優 冬景色

天くらく、ひよ鳥の声さゝ聞へないくらい見る／＼中に、しと  
／＼と降り出したわたのやうな白雪が一つおちては二つおち、続  
いて降りだす其の中を、小さ／＼な小鳥がぱつと飛びたつた。向ふの  
方でもこちらでも、赤いけつと／＼を頭にかぶり、山へ山へと行って  
しまった。いつしかやんだ／＼白雪が、子供の行った向ふの山は、も  
早白くなってしまった。だん／＼／＼てり出すお天と様も、ちよっこ  
り顔を出しながら、ほやり／＼と笑つてゐらっしゃるやうであ

る。さっきの鳥はきーきー／＼ときーきー声を出いでゐる。あちこちの  
家でも昼ごしらゑ／＼で、けむりを出した其の時に役場の役人皆うち  
つれて／＼げたおと高くかへり出したお天と様は直直あかくどこの／  
人でも皆家へ家へとかゑり出した

甲上・優 私今正月元旦

人ハ休マズモチヲツク音モシナイ唯チニ在所ノヤネノ所デノヒ  
ラリ／＼トシテキルクロツギノツイタ日ノ丸ノコツキ何トナク正月  
ラシクナイ。／＼学校デモ式ヲアゲズニ冬休ノカッコーデコヲ見テ  
モカハラデ／＼コノヤウナノニ正月ガ出来ル物カト思ツタガ如何ニサ  
ビシキ／＼正月デモ年ハスデニ一年コイテ私ハ十三歳トナツタ

甲上・優 私の役メ

ガラリ／＼トノ音ヲ幸トシテニカイニカケアガツテ／＼ガラリガラ  
リ、下ニ下リテオモテヲタテタ私ノ役メハコレデ／＼ノスンダ。オイ、  
エ、オマエノ役メハ之デスンダカトイハレタ。オカアサンノ声ノ  
ハツト思ツテ考ンガエテ見ルトランプランプト思ツテ火ヲトボシタ  
オ父サンニオヂイサンヤッキ／＼トドーグヲカツイデ家ヘカヘツ  
テ来レ。タ私ハスグコタツニ火ヲ入レテオイテ皆一同ガゴハンニノ  
向ツテ様々ノ世間話

甲上・優 四方ノ林ノ話

大きな雪に降吹かれまっ白くなった様を見て／＼人は銀世界などと

言つたのしんでゐる／私は大そうはらをたて、私はこんなさむい  
／めをしてゐるのにと一人言をいつてゐたが私／には手も足も目も  
口もないどうしても人間／に向ふことが出来ないある時私等のそば  
に／一人のかりゅうドールがやつて来た、うまいと思つて私／は一度  
又一度と身ぶるいをしたするとせなにゐた雪がをちかゝつてそれ  
見よおまへも銀か／らだだといつてやつた

（大変面白くよくかけたことに「それ見よ……」ほんとによ  
くできた

優 水車

いつもいつも私がまはつてやるけにおま／へもついで仕事をする  
ことができる  
／のだと車がいった／すると中の機械がおまへがまはつても私／  
がなければ米をつく事が出来なから／う。おまへがあつても私がお  
つてこそ米が／ぬれてしまふじやないかといふあとから水／がや  
つて来ておまへ等が居ても私が車をお／いてやらねばまはらんで  
いかと言つた

甲上・ 寒き朝

ぴゅうぴゅうがた／といふ音に目をさ／ますとお父さんお母さ  
んべつたんばつたん／とはづみよさそうにもちつきだもつくり  
飛おきて見ると何かがた／／といふのでまどをあけて見ると雪は  
三四寸も／つもり雀はちゅう／と木をさがしながら我／先にとか  
くれやうとしてゐる時計は六つ／又一時間しては七つとなつてすぐ

顔を洗つて／来て道をつけておいた向を見ると先の方でも／道つく  
り山の方は銀世界だ  
／白銀の花の世界だ

優 年の暮

大根・いも・ごぼり等あらつてゐぬる人多勢神前／神社の森の中に  
ひらりと見分かつたかざり／明日をまつてゐるらしいびは紅梅など  
は花／のつぼみで明日はと此もまつてゐるらしい人は／大勢急ぎ  
急いで物買ひ又かけまつべである人も／ある子供はのぼせてけた  
をはいて見たりたびをはいて／見たりしてあそんでゐる、だん／  
ひるにな／つて雲もかすかに暗だした。明日は正月であるから。  
すまきた世空に初日を待たすことが出来るでせう  
清きつてしまふでせう

（すら／と一点のよどももなくかけたには感心のほかはあ  
りません

優 正月の朝

十五六匹のほたる光を出して飛んでゐるやうにびかり／後  
から後からと続いて行くがらん／といふかと思へ／ばぱち  
／とさびしい森の中からひびき渡るだんだん／音もまして来  
たかんぬし様はでんでん／／とたいこ／をた／きながらおが  
まれるちよーちんはぶら／／いぬる者もあればくる者もある私は  
お父さんやお／ぢいさんについてえは／参をした向を見ればはたる  
の如く／夜はふけて少しづつ人はあるき出した  
男子／目んば、人の家に行つてじらい工兵面白本を見る／女子



るものはない向ふの山上には霧が／かゝつてゐるつばめは四、六、こび、三んでゐる

甲上： 瀑布

水の奇観は瀑布に如くはなし日光山の華厳の滝は三大／瀑布中最も大にして直下七十丈の水は絶壁に水晶のす／だれをかく中央以下は霧と散り雨と飛びて水烟深谷／をおほい紀伊国那智山の最も大なる大一の瀑布は高さ八／十丈餘と称す神戸市に近き布引滝は美しき滝にして／真に白布をさがせるが如し養老滝は孝子の傳説を以て／名高しナイヤガラは世界大一の瀑布にして左右二つに分れ／右をあらそい其のひゞき萬雷のとゞろくが如く様なり水の／しぶき枯木に氷結して水晶の花を咲かすは嚴冬の頃なり／其の奇観真に名状すべからず

甲上： 此の頃の時節

二百十日も事なくすんで稲は全。実が／のつて群。雀はばばったばつたと飛立つ／日日涼しくなると共に燕はだんぐ／にげて／ゆく夜は涼しき風に吹かれながらも「すいっ／ちよ／く」となくすゞ虫の声もす。で。涼。／ひ。向。ふ。の。方。で。が。ち。ゃ。／／／／といふ折。か。ら。り。ん。り。／ん。り。ん。り。ん。といふ声は口にはとでもつくしがたし、／今頃は涼しくなつて第二学期にかゝりかけたから一層／勉強せねばならんよいつ節である

ポートレース見物にさそう文

拝啓夏の暑もゆめの如くに過ぎて虫の鳴く／秋の時節と相成候処

貴兄は御かはり之／無く御勉強のこと、よろこび居り候／私事無事にて毎日通学致し居し候間御安心／下され度候来る十月一日には湖山池にて鳥取師／範学校のポートレース之有り候由に付き父と／共に見物に行くつもりに御座候貴君も御さし／つかへなくば御伴致度候若し御賛成に候へば当／日の午前六時までに私方まで御光来下され度／待ち居候何分の御返事くだされ度先は取り／急ぎ御さそい申上候 拝具

甲上 運動会見物にさそう文

拝啓夏の暑もゆめの如くに過ぎて虫の鳴く／秋の。半。と相成候処貴兄は御かはり之／無く御勉強のこと、よろこび居り候／私事も無事にて毎日通学致し居り候間／御安心下され度候来る十月の下旬に日置谷／尋常高等小学校の運動会之有り候由／に付き父と共に見物に行く都合に御座候／貴君も御さし／つかへなくば御伴致し度候／若し御賛成に候はゞ当日の午前六時までに私方まで御光来下され度待ち居り候／何分の御返事くだされ度先は取急ぎ御さそい申上候 早々敬具

蔵光工

・・・様

甲上 運動会に友を招く文

拝啓時下秋冷の候益々御健強まことにうれしく／存じ候さて来る十月二十九日（火曜日）には我が／中。郷。校。の。校。庭。に。て。朝。九。時。頃。より大運動会／開き候間さし／つかへなくば御親友と共／朝の七時頃より私／方まで御出で下され度若し雨天ならば順／延に候由／御光来

下され度待ち居り候先は／取急ぎ御案内申上候

早々

十月十日

蔵光工

友達様

甲上 軍人を迎へた

午前十一時学校を出発して潔よくも吉川／に着いて道の右側に一列に並んで今か／と待ち居れり早くも騎兵一騎二騎と打続く／赤ずぼんもゆかいなり馬はせいせいどーどーとしてかけ／あしす青谷日置の各学校の生徒は校旗をひるが／へしながら軍人を迎へた其の内に砲兵重兵など／打続いて来る今や一時二時と相成る所へ歩兵第四十聯／隊しかも勇ましく進んで行った生徒は軍人を迎へてかへった

甲 日記

十一月十日 月曜 雨

今朝は別に早くをき、出て向ふの方を見廻すと一張二張／のちよーちんが打続いて下へ下へと出でて行くのを／見てかへった朝食をたべて色色なことにて一日を過せり

十一月十一日 火曜 晴

今朝は朝早くからからすの鳴く声もよろしい／ごはんを食して倉のやねをひいてすむと昼めしを／たべた、午前四時半頃に生徒がかへって来た／夕はんをたべてゆにいった

甲 柿を送る手紙

今年<sup>昨年</sup>は作年と相ちがって柿が多くなりましたからすは／朝早くか

ら柿の木にて鳴いてゐます私等は毎日柿の木に／てかんでゐますのにあまりうまいのでいつがあげたい／とは／思へども折なくして今日さっそく日曜でしたから／とりました故／すこし／ばかりですが皆が一つづつなりともかんでみて下さい／今年も四五本もつぎ木をしましたからまたいつか／御送申します

敬具

甲上 晩秋

黄色の稲も暮れはて、今は早くも見ゆる限りは緑に染つてゐる庭の／葉花はいとさびしそうに菊をたよりに咲いてゐる向ひの／竹藪で群雀がにぎはすは丁度是と反対である、／山後の紅葉は峯の常盤を以て一層引立ち暮行く秋にあられ／はだん／飛んで来る田舎の子供はいもを食／い食い出で、来る

甲上 書取練習

修聖承宝宗協鍛誠志寿幾組織計／郷誘廢奮距浪災包悟虜慮打制収固／僅激朕烈対泣設縮錠整側庫私崎繕／周象測帯掲示掲避刻晴弱表枯与腐／浜投憤蒸援諸息方見援憂解励独辱／陥再慈戒叱確若郡署委坪就昼慶余／及齡好惡封否推

甲上： 今朝の大雨

がた／び／び／といふ音常ならずしてね／から起きてもどより四方をながむればみぞれは一生けんめんに／飛んで来る夜あけて一同と御飯をたべて学校へ来かけ／た人は一人として出てゐない見る見る内に奥山の山頂は／早真白くなった生徒は一人又一人と続いて出てきたから学／校へ来てそーじをすまして火ばちにあ

たつて手あぶり／足あぶりして自習へかゝつた。

### 尋常小学校第六学年

#### アラビヤ馬

アラビヤは世界に名高い良馬の産地であるアラビヤ馬の長途の騎行にたへたることは実に驚くべき程で四五日／間うち通し毎日三十里位をかけるのは珍らしくない飲まず食／はずに終日終夜走つても尚平然として居るといふことであるアラビヤに良馬の多く産するの風土が適してゐるばかりでなく土人の絶えて糶まぬ丹誠の結果である古来アラビヤ人は馬を家族の一員と考へてわが子同様にかはいがり馬もよく飼主に／なれてその家族一同と親んでゐる或人のアラビヤ旅行／日記に次の様なことがかいてある「馬が子供と遊ん／でゐるのを見たことがあるやと立歩きの出きる三つ／四つの子供が馬の尾を引き脚をなで／戯れる馬はさも／嬉しさうに口でおもちゃをさ／げてその子供をあやして／ゐるた比の一事でアラビヤから名馬の出所が分つた」

#### 稲刈に人を頼む文

拜啓時下秋冷の候ます／御強健のこと、よろ／こび居り申し候次に私方一同何の障もなく暮し居／り候間憚ながら御安心下され度候さて近頃／の天気つゞきに田の面の稲は餘程色めき申／し候につき来る十日頃より稲刈に着手致した／く候へども何分時節柄とて日雇これなく大に／困り居り候承り候へば御地方には手あきの／人もこれあり候由若し心当りのもの之あり候へば／何人を問はず御世話なし下され度失礼ながら／手紙を以てお頼み申上候

早々

#### 秋祭に人を招く文

拜啓来る十九日は當村氏神の秋祭に候間何の風／情もこれなく候へども萬障御繰り合せ皆々様／前夜より御光来下され度御案内申上候

月 日

氏名

敬白

宛名

#### 運動会に友を招く文

拜啓野も山も錦を以て包まれ候今日この頃御／君様には何の御障りもなく御通学なされ候也／御たづね申上げ候次に私事も無事にて勉強致／し居り候間何卒御安心下され度候さて我が校／年来の望なりし運動会本年は校庭も餘程広く／相成り候事とて来る二十九日（火曜）午前第九時を／あいづに運動をはじめ申すべく候につき萬障御繰り合／せ御入来下され度別紙運動の種目一枚差／上げ申候先は御案内までかくの如くに御座候／

追て當日雨天に候はゞ順延に候につき左様御承知

下され度候

草々

#### （無題）

拜啓、桜花咲きれんげ、ばうばうたる広田の空に朗な／声をとゞろかすひばりの時節に相成り候、／さて先生と御別申候てより早六ヶ月の久しきと相成候／其の間何の御さたもせずまことに相すまぬわけに存じ候／先生はいつもいつも御強健にて候也小生も毎日毎日

先／生の家の前を通りて通学致し居り候あなた中郷を御去／られ候  
後の宇多川先生も日置の学校（転任され亦も／あらたに横山先生お  
出になり面白く有益に学び居り候／おわりにのぞんで先生の御強健  
を折りおき候

早々

田植に手伝を頼む文

拝啓、麦は熟して早、田植の時節と相成り候所今年も昨／年のと  
ほりどうか田植の手伝致し下され候唯女二人／と男二人にて良しく  
候間六月三四日にお出下され同月／の八九日まで御宿致し下され候

おつて葉書の附しだいに返じ下され候どうか御光

来下さるやう願上候

敬具

五月二十九日書

……より

……様

年賀の文

承り候へば御老母様丁度米寿之御高齡／にならせられ候に付明日  
は賀筵御開きの由にて／小生まで御案内下され万謝仕候就ては御祝  
／の印までに御羽織地及樽肴とともに進呈仕候／間御納め下され度  
候何れ<sup>ハイス</sup>拜趨の上御寿ぎ申／すべく、先は右まで 草々謹言

同返事

御手紙拝見仕候陳者老母儀古稀に相當り／候に付心許りの祝宴相  
催し度御案内申上候／處種々御高贈に預り却て痛み入候何卒時／刻  
に先ち御光来下され度相願ひ候尚老人よりも／厚く御礼申述候

早々

悔之文

拝啓御尊父様には御病氣の處御醫藥の効無之／去何月何日御逝去  
の由驚入候御病中とは承り居り／候へども格別の御事には無之と承  
り居り候に本日／計報に接し何とも申上方なし事にて候定めて御／  
愁傷の御事と存候香燭一封御靈前に御供へ／下され度候何れ後日参  
堂の前御悔み申上度候

早々

同返事

拝啓老父死去に付御懇なる御吊詞及び香／奠を賜り有難く深謝し  
奉候當分の事と思／居候に一昨夜より病勢一変し何かと尽力致／し  
候へ共終に不帰の客と相成り残念に存候／先は取敢えず御返事まで

草々

(無題)

拝啓先日は御手紙下され有がたく御礼申上候／其の後は御無沙駄  
致しまことに相すまぬ由に御／座候御手紙ニテうかゞい候へば先生  
は御強健と承／りまことに喜び居り候私事毎日元氣にて通学／致し  
居り候

さて日独大戦争の事を新聞にてくわしく知り／成るべく大日本帝  
国の大勝利を祈り居り候又／先生上京の途中は當学校にも御立寄  
下／さる事今より楽しんで待ち居り候本年は殊に日／陽統きに於て暑く候  
へども病氣はかくべつ流行／致さず候夏休は早くも終り横山先生の  
六週間／現役もすみ夏休後ニハ帰校致され今は楽しく／学び居り候  
さて今年の稲作を一口申上候／今年は大豊年であると思ひ居り候

に二百／廿日頃の大暴風に稲は倒れ候がしかし、比の／分で天気も良くなれば豊年であらうと思ひ／居り候次第に涼しく相成り候間御身御大切になされ度候

九月二十五日

後藤喜與殿

蔵光工より

敬具

### 由利八郎の事を記す

由利八郎は藤原泰衡の郎従なりき頃は文治／五年源頼朝奥洲の藤原氏を攻める時八郎／頼朝の軍にとらわれたりき時しも頼朝の家臣／功を立てんと、とりこにしたるは我なりと言ひ争ひ／たれば頼朝梶原景時を召して問はしめしに／景時無礼なるふるまいをなし八郎一言も答／へざりき次に畠山重忠を召し問はし召され／ば重忠礼儀を厚くしヨロヒの色目等を問ひ／ければ八郎はゞかる所なく答えたりきさるに／ても八郎の意気の強さ如何ぞや

### 江戸幕府の政策

徳川幕府の政策は公家法度及び武家法度を定め皇族、公／卿、大名の守るべき所を定め徳川幕府二百餘年の基を興／せり又朝廷に対し奉りては供御の料を増加せしめ皇居を修／理し又廢れたる儀式を興し陽には朝廷を尊貴し奉れども陰／には公家法度を勵行し朝廷を柳制し奉れり亦藤原氏の／例に習ひて秀忠將軍の娘を納れて中宮となし皇室の外／戚となれり諸大名に対しては転封を盛にし武家法度／を勵行し中にも秀吉の忠臣加藤、福島の両將共家はだ／んぜつ我が身はせつぷくとなれり又隔年毎には諸大名に參勤交代をなさしめ妻子等は人質となしたり／幕府の要職には7代大名をなし外様大

名には職の権利／をあたへざりき其の要職には大老中老若年寄等／あり徳川幕府集権の実をあげ得たり之徳川幕府二／百餘年の基なり

### 運動会の案内状

拜啓天高く馬肥ゆるの候君は如何に御暮し候也／一寸伺ひ申候私事日日楽しく通学致し居り候／さて来る十月二十八日を以て吾々の期待せる運動会／を挙行致され候但し雨天に候はゞ順延に御座／候本年は去年に比して運動を改正し君等の御見／物には良ろしからんと思ひ何卒萬障御くり合せの程／御来観下され度候 草々敬具

### 法事に招く

明後六日は亡父の三週年忌に相當り候に付心許りの法会相営み／墓參等も仕り度しと存じ候御繁用の折柄御迷惑とは存じ候／へども貴下には父生前中特別御入魂の間柄にも候へば狂<sup>マダマ</sup>げて／御来車下され度比段御招待申上候 敬具

### 同返事

明後六日は御亡父様三週年忌に當られ候由御招きに預り有／難く存じ候 仰の如く御亡父様とは多年の交りも有之平素御無沙汰勝に／打過ぎ居り候事故是非定刻までには參上仕り御伺香申上候積に御／座候先は右御受まで斯の如くに御座候 頓首

### 歳暮の文

拜啓其の後は意外の御無沙駄<sup>マダマ</sup>致し候段／何卒御容赦下され度候本年も早残す所／は十日餘りと相成り候當地も次第に寒く相成／候

が御地は如何に寒むからんと存じ居り候／本年は多大の御世話致し下され有難く御礼申／上候此の後も宜しく願上候、比の品は歳暮の御心持にと密柑一かご軽少なながらも御受取を／願上候又次第に寒氣せまり来り候間何／卒御身体御大切になされ度候／ 草々敬具

### 出征兵士に送る慰問状

拜啓紅葉散しく晩秋と相成り候朝夕身を／ふるはせて新聞にて承ひ候へば貴兄方の師団御／出征と聞き今は膠洲湾及び青島にて大奮／発を致され居る事と思ひ我が大日本帝國の／名譽を挙げさせられ又御守護致し下され／有難く御礼申上候候りに望んで出征兵士の／健康を祈り居り候 草々敬具

### 冬景色

黄に紅に林を飾って居た木の葉も大方は散り／果て、遠くの山々は早真白になって居る山おろ／しの風は身にしてみて寒い／こんもりと茂った宮の森の松や杉がわずかに緑を色どって居る御神木だと云ひ伝えら／れて居る古い銀杏の木は木枯に吹きさら／れ／て今は早葉一枚も残って居ないでは／いきを立た／した様に高く雲を私を／として居る。／広い田の面は稲の切株ばかりでかゞしの上にも／残って居ない畑には麦がもう一寸程にのびて居る／それと隣り合って葱や大根が青々として冬を／知らない様に活々とした色を見せて居る畠を／めぐった垣根には霜にやけた黄色な寒菊が咲き／残って居てそばを流れる小川に影を写して居る／比の小川で目高をすくふ時は何時であらうか。

### 冬の寒

冬は活動の時である僕は一面に銀世界になった野原／に飛び出して雪合戦をするのが一番好きだ。／耳元を通る白い玉をよけつゝ走り廻った足の跡も降る雪に／直ぐ埋まって丁ふ雪合戦を終って軒下に行った時の真白／になつた着物赤い血潮が漲つた様な足そこに勇氣が満々／してゐるではないか。／冬は又勉強の時だ月が柿の木を照して黒絵の様な影／が映つた雪景色を眺めて続書するのは実に愉快である。／僕は冬の寒さに身体をきたへ夜長の勉強に精心を／練って冬を過す積りだ

### 雪の朝

隙間から洩れる冷かな風に夢破られて臥床をすま／すと、まあ美しい一夜の内に庭も家もかくれて世は唯々銀／の世界となりました。庭の隅にあつた鹽埃は影も形もなく／常磐木のみどりばかりは入色を染えてゐます其の側に／水仙の花一人頭をもたげ笑顔をもらして居ます雀の／ち／と鳴き見なれん景色に驚き顔をするのも可愛／らしく見えます。小犬の雪の上を遊び狂ふ愛らしさに思はずは／えみました。

### 佐野源左衛門尉常世の事を記せ

佐野源左衛門尉常世と云ふ武士は佐野の莊三十餘／郷を領して居たれども一族親類の者に押領せられ／山間にて、わびずまいをして居たりき、ある時僧の／来たりし時、粟の飯を出し、自分の秘蔵せる、梅松桜の鉢の木を切りて、あたらせたりき、そして如何にま

づ／しい暮をして居たれども鎌倉に一大事あれば／一番先にかけて行くこと云ふ事を告げたりき、／さて鎌倉に武士、集ると云ふ事を聞くや否、我先／きにと、やせ馬に乗りはせ行けり、最明寺入道時頼／は是を召し出だされ自分が宿を借りし時の返返しにと／て佐野の莊、三十餘郷と、梅松桜を頭文字として／梅田、桜井、松井田、の三郷を、子々孫々に至るまで所／領相違あるべからずと云ふて、あたへたりき、／常世意外に喜び佐野の故郷さして帰りたりとぞ

### 高等小学校第一学年

甲 展覧会の状況を知らず

寂しい片田舎の我が村にも楽しい春が訪は／れ鶯、後の梅に來りて毎日啼き居り候、／貴兄如何に御暮し候也一口申下され度候、私事日／々楽しく通学致し居り候、去る二月十八日には／楽しい展覧會及び農産物品評會並に本村／青年會總會を挙行致され愉快に御座候、／さて其の状況を一寸申上候、／展覧會は如何にも有益にして図画及び手工は／三、四學級の室にかざられ清書並びに理科用／機械は第一學級の室に、大なる、書及び図画は／第二學級の室にかざられ候亦品評會の品は是／も第二學級の室に並べられ其の賞与授与式は三四／學級、及び青年會總會も同室にて行なはれ、何れも／和氣揚々たる中に挙行致され又午後は餘學と／して、なには筋等有り何れも面白く有益にて御／座候、終りに望んで、段々暖くなり候間一心に勉強致／し下され度候、

敬具

### 卒業生ヲ送ル辭

月日は流るゝ水の如し時間は人を待たずとかや、螢の光／まどの

雪にて精勵勉強に學問に勵まされし時も今は／夢の間と過去つて、今日しも広々たる室隅にて我が高／等科第二学年十餘名とと離別するは、かなしみ、／又悲みの至りなりされど八ヶ年有餘なんなく學びて卒業するは名與の致りなり其の間共に學び／共に遊び共に勵みし事つら／くと考ふれば御世話／になりし事挙げて数ふべからず、嗚呼、惜しいかな上／級生、吹雪の昨日、雪の今日、共につられて學び／たりしを思ひ出だせばうれし涙きんじ難し、是を／持て送辭とす、

蔵光工

### 高等小学校第二学年

甲 尾崎先生の許に

拜啓庭の桜の梢まで赤々と朝日に輝き裏の柳につば／めの飛び來る様一筆言ひ難し、郵便の今やをそしと我が校／になげ入れたるを早見れば尾崎先生の名残をおしまれし手紙であ／りります我等は嬉ばしく是を拝読しました、先生、……我等は今／新たに先生を迎え楽しく通学致し居りますれども／先生の御事績を思ひ出し名残惜しく空しく彼方の／空をながめ居ります、又昔を思ひ出し我が三年生／の時悠々我が校に來られ、知らぬ事あれば手／を取り給ひし事今つら／と思ひ出だせばこいしく／なつかしく、思ひます、又本校運動會の時は是／非御臨席下さる様願ひます、今は、涼し／といえども暑き夏の日にむかわんとしつゝある／今日、御身体大切に、勉強に勵まざるゝ様／幾重にも願ひます私も身体を大切にし／一増勉強しすから、

草々不一

大正四年卯月四日

蔵光工

尾崎先生様

(今少し工夫せば上々ならんに)

## 甲 第一校時

始業ノ鐘ハ運動場オ過ギ<sup>田</sup>マ<sup>田</sup>過ギ向ヒノ山マデ鳴リ渡ル、ノ我ガ同級生ヲハジメ等シク打並ンダ、ヤガテ校長先生ノ朝礼ノ辞ガスムト当番ノ先生ヨリ礼ノ声鋭クカケラレル生ノ徒ハ挨拶シテ順々ニ我ガ教室ヘト這入ツタ、我等同級生ノモ教室ニ入ラントスレバ折コリアレ、花瓶ニイケアリシ桜ノ一ノ瓣ヒラヒラト。我ガカタ元ヲ過ギユカノ上ニ落チタ、ガラハトノ戸ヲ開ケテ受持ノ先生ハ、ゾーリノ音高ク教ダンニ上ラレルトノ生徒一同ハ不動ノ姿性ヲ取ルト級長ヨリノ礼ノ声、隅カラノ隅ヘトヒビキ渡ル、他教室カラモ礼ノ声ガ聞ヘテ来ル、一同ハノ礼ヲシテスワルト先生ハ本ヲ出シテ等色々言ワレテ始メテノ静マリ返ツタ、……コツ、亦コツ、ト鋭筆ヲケツル音ガ静ニ聞ヘテ来ル、ノ第一校時ヲ終ル鐘ノ音ハノ何処トモナク聞ヘテ来ル、二二年生ハ、校庭ニテ一生ケノンメイニナツテピョンピョント飛ンダリハネタリノ走ツタリシテキル様子、

## 甲上： 清国（中華民國）

夕飯も終りたりしかば見続の日独戦乱實記を手にしたノりふと膠洲灣に付きうとくと清国の事項を思ひ出しぬランプの光は風の来る度に時々暗くなる、即ち清国は亜細亞州の東南に在り、亜細亞大陸の大部分を占む、我が帝国の約二十五倍の面積を有し川はをむね東南に流れ、湯子江、江河、球河は其ノ重なるものにし

て、広々、渾々なる大平野を有せり、剩さえず大平野を有せるに土地肥え産業多大にして輸出品多しがつて大なる貿易都會隆れり然れども共和政体にして強者奪國ノなれば尚振はずありぬ

我等は支那を顧み比の際一大奮発して、多いに發展し海外にノ雄飛して一度錦を着ざれば帰死の勢を持つて一大決心の下に立派な日本人とならなくてはならぬ……などうと考へ致れば夜はしんしんと更け渡れり、餘りの心細さにノ少々雨戸を開けて外を見やれば、折しも月光は昼をあざむくノ如く心は一層しんとせり夜は刻々と更け渡る、

## 拾 尾崎先生の許に

拜啓、百花ごとごとく散りはて、見渡す限り黄緑の時節とノは相成り候先生には、何時も御無沙汰ばかりに打過ぎ候間ノ比の段御許し下され度、先生は本校を過去されしより、何時もノ御元氣よく、御勉強なされ候也一寸詞ひ申候、私事無事にノて、日日楽しく通学致し居り候、亦中郷校の教師方も一心に我ノ等の為に導びかれ候間、御安心下度候、高等科第二学年ノとは相成り候へども、格別、むづかしとは思ひ申さず岩田校長ノ先生の御熱心により、立派に教訓され候、又我が校増築のノ設計も日に月に進歩致し候間、若し増築、落成致し候はゞノ御光覽の程今より待ち居り候、ノ亦運動会を初め其他の時にても生徒諸君を御共に御ノ遊に御出で下され度候、ノ今は、勉強に適して居るといへども段々、暑夏の候と相ノ成らんと致し居り候間、御身御大切になされ度候ノ 草々不一

拾 日記文(文語三改作)

五時ニ起床ス。/日本晴レ。/朝顔十二咲ク。/朝食後読本ト算術ノ復習ヲナス。/東京ノ叔父ヨリ繪葉書來ル。/午後親友秋山君來訪ス。/全、五時頃ヨリ鳴ル光ノ大夕立。/夜、月ヲ踏ンデ父ノ使ヲナス。/

拾 日記

五月一日、/朝いと涼し、曇り勝なる、空より、日影折りく漏る(天氣ノ一)/今日は誠に結構な卯四月八日でと垣ごしに隣の人に挨拶す(出来事一)/桑畑に行き、桑の葉をとり正午に至りて帰る(出来事二)/午後、キウリの種子ヲ播く(出来事三)/夜に入りて雨(天氣ノ二)

五月二日、/暁より雨降る、/友を訪ひ夕暮に帰る、/雨やむ、/蛙の声俄にさはがし、

五月三日、/曇、晴、定まらず、雲に殺氣あり、/この朝殊に、冷なるを感ず、/ワシントンの伝を読む /大人物なるに感ず、

/雨俄に降り出でて、また忽ちやむ /畑に出で草を抜き父の手伝をなす、/

五月四日、終日、雨 /畑のものも庭のものも皆腐りはつる心地す、/

拾 甲上 都会と田舎 文語、議論文

一國を分てば必しも都会と田舎になるならん、若し都会と、/田舎と何れが住み良きか 此の問に対して、百千の人は五/分五分に

ならんも不思議なし、然れば都会の人景/色鬱々、広々たる田舎の草野羨しく田舎に行かんとす/するも不可なし、如何に国会議員に<sup>て</sup>吾作、必度都会に出でんと/するも不可なし、如何に國會議員に<sup>て</sup>も、結し難きは/かゝる問なるべし、先づ、都田の長短をのべ優劣を、/はからんか、都会は便利なり、亦繁華なり、夜は、/昼をあざむく電燈あり、行き交ふ人馬のにぎは/しさ、如何でか田舎百姓の得らるゝ所ならんや、/学校あり、官庁あり、病院あり、諸々の商/店、合並んで得んと思しき物得られん物なし/然ればこそ都会に出でんとする感あらん /又都会の者田舎ののどけさ、静けさに<sup>を</sup>羨やみ/春は花見、夏は水泳、夕涼み、秋は、紅葉狩、/冬の雪景色、農夫の心の如何に心安きかを、/感じて、田舎の人にならんと思ふも不可なし、/然らば都会に出でんと思ふ、田舎人よ一國の/強固なる志を持って、雄飛せば如何なる、事業/もなし遂げ得んや<sup>らるべし</sup>

甲 母乃愛 普通文

『逃げよう』。/の聲は天地もふるうが如く、/牙かみならして今や飛び荒る、<sup>る荒獅子一匹あり</sup>街には一人の/影もなくなりぬ。うなり声は天にひびきて、市内の/人心を、おどろかす、むじやきなる子供たゞ一人/遊びに餘念なく悲みの声も聞き入れず、たゞ/ぼうぜん<sup>ちんせし</sup>と街に歩くと、荒獅子は立髪風<sup>たてかみかぜ</sup>にふるをせつ、猛り狂へりあわや、子供の一命は風前の燈火なり/「うつ……と牙をむき出し今飛びかゝりし其の/一刹那<sup>ちんせし</sup>に<sup>実に</sup>此の時早く彼の時おそく、子を愛する/の一念に母は折から髪ふりみだし子をいだく/如何なる荒獅子も母の念力に劣ったか、/寸刻の為に、良き糸物を失った、とは獅子

／の思ひであらう、高きまど、戸のすきま／しのびにしのびつ、此の有様に見なれた／子の母等は、嗚呼慈愛の一念は糸らしい／若しやかゝる時には、我等も子等の為に／一命を尽しても助けてやらう。

### ◎ 春と秋

身もちゞむ様な寒い冬は何時しか過ぎて鶯の、谷間を出て、丘に咲き／揃ふ梅の枝に身をさかさまに歌ふ春、単衣も着たくない重若しき夏は／何所にか行きて虫も鳴き今迄、はゞをきかせし燕は逃げて熱帯地方より逃／れ来た雁に交つて秋とはなる、春と秋、何れにか優劣はあらうが仲々定／まり難いは北の春と秋の二季であらうと思ふ、先づ定め様か。／なまぬるき風は遠近を吹いて待ちわびし桜を咲かせ、いろりの辺にうづくまりし／子供も春と成つては仙竟の野辺に遊ぶの感がするであらう。／一日あぜを流しつゝ働いて寺々の鐘と共に我が家に帰りし時、涼しき風は虫／の声をちぎれ／に聞かせる、月はさえ渡りて雁の数もあざやかに分る時／月影ふんで千草の野辺に出るも面白し。／嗚呼春と秋、何と云ふ良い時期であらう、春は運動会、行軍／何れも百花咲き満ち、人の心も浮立つ時に行はれる、／秋は是に引き返えるに、稲も黄金の如く、良く実のり、所々に麦の一二寸のび／たるも見る、根根の内には、枝もたわ／に熟せる、柿の木に、よぢ登りてかじり／廻る子供あり、天長節の来る時期、大輪一二花咲き揃い、君が代の歌と共にあがめられるも皆秋である森の中では、かぐらの音も聞える、大方／豊年祭のあるであらう、／春は、雁の声もなく、菊花挨拶うふ時も無い、／されど其ののどけき、紅葉狩に返るに花見ある、ひょうたん、せをって都会／者のぶらり／とのどけき黄金の十字花の間を綴りて

花霞たなびく野山／にと向ふ景色、時をもくれて夜もかりつくされ、すげ笠軽く、赤き、こしをび／輪快げに、つばめのさえずると共に、のどかな歌に気取られつゝ／悠々活らき一日田植するも面白し、春雨は糸の如く、柳の芽も一日一日／とふくれて、唐傘の一つ歩くもたのもし。／時鳥は悲しく身をさす様な声を詩人歌人の耳につたえて／遂に夏へと時候は急ぐ云云

終

### ◎ 展覧会及び落成式当日の記

暁の明星は何時か消え失せて、明け渡る空には黒鶉の／鳴声もいと愉快に聞える。／今日は十一月十七日、校舎は魏然田中に高く聳えて／落成式を待つ。／日頃練習せる成績品を列してまばゆく輝き麗く光る、／白金色の雲は一团又一団南の方へと流れる、秋日和の／校庭は早くも国旗もて飾られ、弱き秋風の吹き来／る度に閃く、やがて楽体の音は四方の山にひゞきて心優／しき村人を誘ひ招く、／気高郡長を始め郡視学及び村長等の御光臨を得／て落成式開会を告ぐる鈴の音は広々たる広野／にひびいた。／やゝありて、整列せる前に進み出し村長は開会の胸を／告げた。続いて校長閣下の勅語を奉読せらる声／はかん／と我等学生に奮発せよとの意を／よみ込／みます。／太陽は斜射な光を我等の頭にあびせかける、／つゞいて郡長及び有志等の祝詞の和楽の内に終りたる／は是皆嬉しきことでは無いか。／開会の鈴も嬉しく聞へて二階立の校舎はさぞ満／足せし様子なり、山々の人々は皆階下の用意所にて／御即位記念の酒盛りを開くと。／生徒は一同満面喜びに染んで、きびすを帰す、／昼前を告ぐる寺々の鐘はゴーンとひゞきて家路を指して帰る生徒

等に、<sup>異</sup>意様な感を浮べたであらう／嗚呼愉快なりし十一日十七日、／噫楽しかりし落成式よ、

◎ 法会に招く文

明後十八日は亡き曾祖父の五十回忌に相当り候に／付心許りの法会相営み募参等も仕度と存／じ候御繁用の折柄御迷惑とは存じ候へども／御祖父様には曾祖父生前中特別御入魂の／間柄にも候へば御孫様御一同<sup>後同伴</sup>の上<sup>後</sup>狂<sup>後</sup>げて御来／東下され度此段御招待申上候

敬具

同返事

明後十八日は御亡曾祖父様五十回忌に相／常られ候由御招きに預り有難く存じ候／抑の如く曾祖父様とは多年の交りも有／之平素御無沙汰勝に打過ぎ居候事／是非定刻までには参上仰り御伺香申上／候積りに御座候、先は右御受まで斯の／如くに御座候 頓首

◎ 悔状

御老父様御逝去の御手紙を拜見到候、定めし貴下／様を始め御一同御悲歎の事と深く御察し申上候、就て／は早速参上致し葬儀万端の御世話話し度候へども何／分遠離の事に候へば、とても間に合兼候 御悔の印までに別紙為替券封入到置き候間、御靈前／に<sup>香</sup>織<sup>花</sup>香及び花を御供へ下され度候、息を引き取られる其／時には後々の事に付き色々遺言も有之候事と存じ候、返す／返すも残念に存じ候、然れど何と云ひ申し候も今は唯天命と／のみ思ひあきらめ候

より外之無候 貴下様は餘り、御悲歎の餘り健康を損せられぬ様／事之有候ては、却て地下の御老父<sup>様</sup>く<sup>様</sup>に對して申分無事に候間／之より御身体を大切になされ一層奮発到され、御一家／繁栄を許り申候へば何よりの孝行と存じ候、先は御悔／申し上げ候 敬具

◎ 大正五年を迎えて

觀聖文武に渡らせ給ふ天皇陛下、大統を承け給ひ、我等／臣民の喜びの中に在る時、何時しか河水の流と共に、大／正四年は空しく晴天に没して、今日新なる旭日<sup>朝</sup>効々と東／山を離れ、大正五年は榮しく迎られて家の軒端々々に／白赤染めなす日の丸の国旗は、春秋に富む皇国の／榮は一層無限なりと轟る、／嗚呼、今過ぎ去りし大正四年になせし事項を思い浮べんか／忽ち、千悔、募謝の心は赤面となりて著れ、将来／に向って一大決心を持たしむるならん、然れば我等は／新年と共に進取の氣象に富み、益々精神を堅／めて一望遂げ終りて一度錦を着ざれば止まづの精神を／養ひ學事に勉勵し、良事を見ては扱酌し、克己、忍／耐を全して他日、赫々たる成巧<sup>成</sup>を見んの基礎を作り始め／るのは此の大正五年の元旦よりである、／我等は今学生の身なれば将来の事業の基たるべき／學問に勉勵し時間ををしみ、益々精勵して／将来東西文明の融和者として世界平和の維持者として／益々邦家の隆昌を期し国力の發展に尽すべきなり、／僕ハ新年ニ向ッテカ、ル精神ヲ養ヒ増々奮發セント思フ。

(コノ心扶コフ必要ナン)

年賀状（親戚に） 男文

新年の御祝儀目出度く申納め候、貴家御一同御超歲御多祥の事／と存候。昨年中は一方ならぬ御世話に相成り有難く御礼申上候、／なほ私方一同無事年を迎へ候。平素は御無沙汰ばかりにて誠に／申訳これなく候、先は年始御祝に御家族御一同の御幸福と御健康／とを祈り申候。

敬具、

年賀状（友人に） 女文

大正五年の一月一日を迎えたる事を祝申します、新年と云ふ／と何だか心が改まります、かう云う心持になるも偶々にはよい／と思ひます、美しい衣服を着てお室を綺麗に飾って神棚に注／連を張って、お供を上げて若水を取ってお雑煮を頂いて羽子板／を持って何から何まで改まるものです、心持も改まります。／只今まで年賀状が六十八通来ました、其の中で五十五通ま／では父上へです、私には絵葉書が十三通来ました、皆年末／にお出しになったでせう。私何だか沢山もないお友達に暮の内／から年賀状を出しておくのも変な様に思ひましたものですから／皆今日から書うと思ひます、それで、あなた様も好いお／正月をなさいませ、かしこ

スバルタ武士

古来武士道は日本を始め何れの国にても盛なりしが就中希／臘のスパルタ国の如きは盛んにして厳格なりしこと想像の外にあり、されば今直其の誓は永遠に朽／ちざる所なり。／スパルタの大臣、愛国の精神燃ゆるが如く君に対して忠に國／民協同一致し愛国の精

神は直盛んに赴きぬ、男児生れて／満七歳に至れば共同の教育所に收容せられ全くの武士的教育を受け精神身体を克く練磨したれば国民、規律、克己、忍耐、並びに廉潔等の精神に富み祖國の爲には一命を／抛って働くを無上の名譽とせり。／然れば瓦となりて全からんよりも玉となりて砕けんことを請願／ひ、或る戦争の出陣に際して婦人は我が子に盾を授けて曰く／「勝ちて持ち帰れ然らずんば盾に乗りて帰れ。」と言ひたりとぞ。／かくの如く国民愛國の精神に富み祖國の爲には命を捨て、／君につかへしかば後遂に大帝國を形成して其の名聲は今直赫々として醸／めき其の精心は天地と共に他國の模範なり。

◎ 雪（口語常体）

「雪、雪、」何処かで子供の嬉しさうな声がかこえた、僕は／思はず飛び起きて見ると世界一面の銀世界、<sup>白雪</sup>枝の上には五六／寸も雪がつもって綿の帽子をかぶった様な。三つ四つ梅の花の様／な足跡がついてゐた、雀の群が寒むさうにモクセの繁みが間に騒／いでゐる、竹やぶの中で鳥がげえると、さら／と雪の塊が落ち／た、目程出いてスコップを持った爺が二人、白い息を吹き／ながら遇った、「お寒むうござんす」「まあ大きな雪になりました」と話をかはして手を吹いた。／向ひの山はもう何んとも云えない美觀である、篩でふるつ／た様な雪が又しも降つて来た、鎮守神社の屋根が一つ、物凄／い様な森の中に寒むさうである、見渡すかぎり青かった表が／今は真白になつてゐる、犬が嬉しさうに飛んで行く学校の庭／には大きな、だる魔が作られた。／こたつ、<sup>炬燵</sup>に入つてゐた祖母が目鏡越しに外を見て、ああ、と驚／いた、太陽は真白な雪

を照いて目ばゆい。／どろ／＼と雪ずりがする度に猫が驚ろく障子に稚／たけの影が写る、雪は暫く止んだ家々では煙が出だ／した、と、学校ではけた／ましく昼の鈴が鳴る、／道もやうやく人通りが多くなると何所かの画伯が一生／懸命になって写す、／長々と川一筋や雪の原　／とはよく云ったものだ、どう思っても昔の者は賢い。

◎ 修養の必要なる所以

世界の文明は駁駁として進み、我等の知るべき事項は年と共／に多きを加ふ、かゝる時苟くも時勢の進歩に後れざらんことを／期する者は一生を通じて智能の啓発徳器の成就を計らざるべ／からず。／鸚鵡能く言ふも飛鳥たるを離れず、猿如何に智ありとも獸／類たらざるを得ない、人修養せずんば何ぞ是等の動物に異な／る所あらんや、我等今八箇年の長き年月手厚き教師の／手に修養したりと雖も、今後遊惰充滿せる社会に活働／せんか忽ち、取換難き悪風に染むとするも偽と云ふべからず／然れば我等は卒業後、精神を修養するの必要此に／始めて著はれるなり。／世には喜怒哀楽の情に動かされて举措度を失ふ者あり、／これ未だ修養の足らざる所以なれば一に修養せずんば可／ならず。

◎ 吾が希望

世の文明の進むにつれて世人誰しも柔情風に染み奮修宴／楽に耽らんとする時に當り。／吾今高等小学を卒業して以後も益々勉強し地方の教／育家となりて、吾が一郷を始め公共の為に尽力せんと／を望とするなり。／而して祖先伝来の家産を守り、此を慈々

増長せんこと／を心掛け幾才の後をして優良なる村を形成せんとす  
(本学四年生)